地域内村落小史

～農村集落の形成（明治・大正・昭和初期）～

佐々木　昭
千歳市史編さん委員会委員

はじめに

『新千歳市史』通史編上巻の中では、年代ごとの各章に、長都や釜加などの農村集落の形成について執筆したが、ここでは農村集落の形成からの変遷を、開拓や農業だけでなく、地域の学校、宗教、娯楽なども含め、地域史として明治から昭和初期までの流れを切ることなくまとめることとした。

農村地区に範囲を限定し、時代を通して記述することにより地域の歴史としてはわかりやすく読んでいただけると思う。

村落の起源

シコツから千歳に命名される文化二（一八〇五）年頃には、千歳川の水利を利用する川舟と干し鮭・鹿皮を中心とする交易場所として栄え、ビビ・オサツ・カマカ・イサリブト間の水陸流通の重要拠点として知られるようになる。

しかし、交通の要衝だった千歳への入植は、火山礫と水との戦い抜きでは語れないドラマがあった。草創期の農村地域の開拓には、劣悪な土壌と重なる冷水害に悩まされ、遅々として開拓は進められなかった。

この千歳川流域を中心にすでに住み着いていたアイヌの人たちと和人との共存で、それぞれ特徴のある地域開発が進められていったのである。

明治・大正時代の農村部は、千歳川流域の千歳村と長都川流域の長都村（オサツ・カマカ）に分かれていた。千歳村には千歳川より取水の水田地帯（末広）や、ママチ川より取水のネシコシがあり、さらにシュクバイ、オルイカ、キウスと続き、東部地区にはケネフチ、コムカラ、ホロカ、タツウシナイ、シーケネフチ、南部地区にアウサリなどのそれぞれ特徴ある集落が形成された。

一．長都村の開拓

上長都・長都・中長都・釜加地域は昭和の初期まで長都村と呼ばれていた。中長都地域は昭和初期に旧長都北部・釜加第一を分離して出来た集落である。

かつて長都村と漁村との村界はカリンバ川沿いに西一線南二六号付近までの三角形で漁村に食い込み、逆にカリンバ川下流の東側（下釜加地域）は漁村に編入されていた。明治三十一年に東三線を村界とすることにより両村の地籍もほぼ均等に分割された（『恵庭市史』）

そのためか当時の下釜加地域の記述がほとんど見当たらない。

地名の由来　当時の地名は大半が川・沼に因むアイヌ語の呼称である。

長都（オサツ）川　（川尻・乾く・沢）

ユカンボシ　（ヒシの実の生育する・ある・ところ）

釜加（カマカ）　（平岩の・瀬）この平岩は岩石でなく約一万八〇〇〇年前の恵庭岳噴火時の軽石層が硬く厚い土層を成したもの。

カリンバ川　（えぞ山桜の木皮・群在する沢）桜の木があったことの意

（一）オサツ（長都）地域への入植

今から一五〇年程前の「オサツ」（長都）は、楓や柏の生い茂る鬱そうとした樹林地帯で、アイヌの人たちが九戸ほど、ささやかに鮭漁をしていた程度だったと玉蟲左太夫が『入北記』に記している。

勇払と石狩を結ぶ交通として千歳川は非常に重要な位置を占めていた。その支流オサツ川、カリンバ川の流域に大きな舟着き土場があり、トメム川（沼）、オサツ川、イヨマイ川、ユカンボシ川、カリンバ川の周辺に人々が住みついていた。

文化十（一八一三）年、松前藩の漁太場所を請け負った山田文右衛門

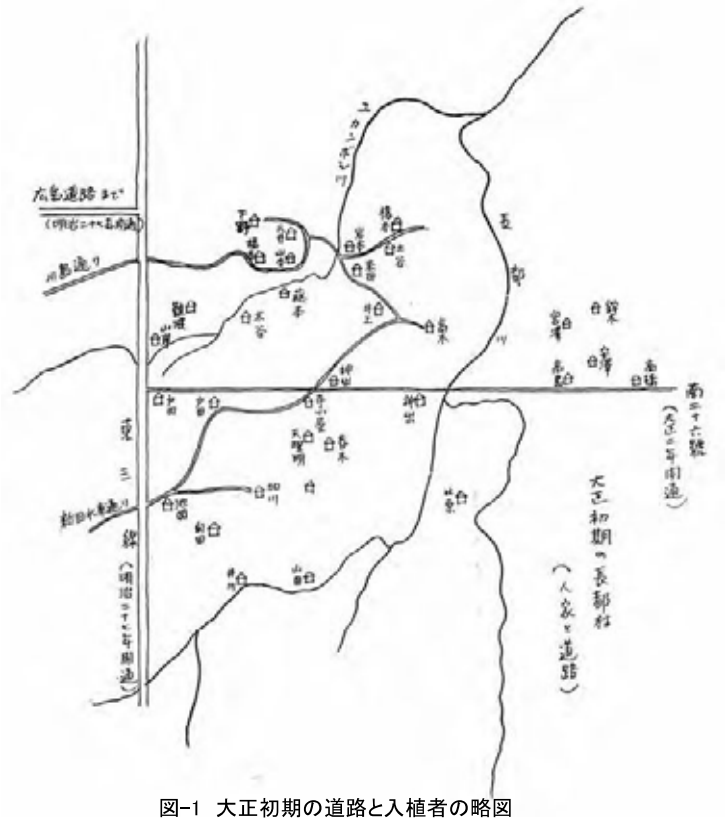

図-1 大正初期の道路と入植者の略図

が、カマカ・オサツ・千歳間に刈り分け道を作った。これを後に「オサツ道」と呼び後世まで使われることになった。当時は獣道で、道幅は馬がやっと通れる程であり、温地を避けて出来るだけ高いところを踏み分けていた。号線に沿って使われていたのは、東三線、東五線、南二四号などで、明治二十四年、オサツ原野の測量完了後もほとんど手をつけられずにいた。

しかしこの時の号線道路、防風林の確保が後世に大きな役割を果たすことになる。

長都村への本格的な入植は、殖民地選定事業（夕張原野・ケヌプチ原野・長都原野・千歳原野の区画測量）が終了してからで、明治二十五年

図-2 明治 30～40 年代の長都村・漁村・島松村の水田分布

の橋本芳（由）太郎、二十六年の難波力蔵などが最初である。

長都への入植者一覧（『長都酪農組合五〇年史』より作成）

入植者	入植年	出身県	入植者	入植年	出身県
橋本　芳太郎	明25	広島県	難波　力蔵	明26	広島県
長谷川栄次郎	明28	広島県	佐藤　豊太	明28	山形県
土谷　弥之進	明29	山口県	木谷亀次郎	明29	石川県
戸田　甚吉	明29	山口県	藤本　惣吉	明29	山口県
井上　鶴吉	明29	山口県	山本　亀松	明31	広島県
神出　甚太郎	明32	広島県	下野二三吉	明35	石川県
高木　作太郎	明36	愛媛県	高橋　音吉	明44	石川県
萱場	明39	小学校教諭	宮沢右衛ェ門	明40	新潟県
安澤　作次	明40	新潟県	高橋清三郎	明40	新潟県
山岸　勝太郎	明40	石川県	鈴木　友吉	明41	新潟県
福本　吉三郎	明41	広島県	比原　長太郎	明42	広島県
神出　智	明42	広島県	谷山　籐平	明44	小学校教諭

入植当初の生活は、専ら炭焼に頼った。炭焼の傍ら、越冬食糧を賄うために蕎麦、麦、粟、馬鈴薯、大小豆などが栽培された。

木炭、雑穀類は、オサツ川、千歳川を経て、江別・石狩に帆掛け船で運ばれ換金された。

この地域での稲作は、明治三十三年頃ユカンボシ川、長都川の流域で始められた。当時の収量は反当り二～三俵と少なかったが、他作物に比べ、水害・湿害に強い主食糧であった。

入植当時の畑作は、火山灰地で冠水被害など気候に左右されやすく、蕎麦、麦、馬鈴薯等を蒔き付けしても、収量は極めて少ないため、自家用の越冬食糧の範囲に止まった。

農業水利　明治の後半、水稲の作付けが盛んになるにつれ、自然流下の灌漑用水が必要になるが、頻繁に洪水に見舞われる一方で、潤沢な水量の確保が得られない時期もあった。大正四年、烏柵舞村、蘭越村、長都村、千歳村が合併し、千歳村として二級町村制が施行されると、安定した水量確保に対する地域の要請が強まり、山本芳一、土谷弥之進、神出智等により、大正九年に約八〇町歩の水利権を出願した。しかし長都・釜加地区の約二八〇町歩の面積をまかなう水量はなく、水量不足解消のために、漁用水組合と、地元代表の高橋徳久、中川力松、森数太郎等との交渉により漁共同用水組合（後の恵庭土地改良区）に合併され、水利権の確保がはかられた（『千歳市農業協同組合三〇年史』）。

長都酪農組合の幕開け　当時の長都は稲作に頼る開拓者が多く、冷害の影響を受けやすい農業形態であった。特に湿害と火山灰には悩まされていた。この苦境打開策として、明治三十七年戸田甚吉はエアーシャー一頭を購入飼養し、翌三十八年に長男菊次を白石村宇都宮牧場へ実習に出すなど酪農導入に取り組み始めた。その時に菊次は黒沢酉蔵と知り合いになり今日の酪農郷への第一歩を歩んだ。

大正年代には乳牛も徐々に増え、大正十一年にホルスタイン系の若牛一五頭を共同購入し、十三年東三線南二六号に共同製酪所を開設、同時に「長都酪農組合」が誕生した。当時の製酪所技術員であった福屋茂見は、『長都酪農組合五十年史』の中で、これらの経費の大半は戸田菊次

写真-1　昭和８年に建設された長都集乳所

が賄っていたようだと話している。

昭和八年、長都酪農組合は、総会で千歳産業組合に利用料を払う見返りに「長都集乳所」を建てさせることを議決した。菊次等は北海道製酪販売組合連合会（酪連）に移管することで合理化を図ろうとした。

しかし集乳施設の建設に対して、道庁は酪連直営とならないことから補助を認めず、結局昭和九年産業組合から融資を受け東七線南二六号に新築移転となった。こうした事態を収拾したのは、二代目組合長中村茂であった。中村等は未だ集乳所経営を戸田菊次に負うところが多いため、牛乳集荷と飼料販売はすべて産業組合がやるべきと主張、十二年八月低利資金を得て集乳所脇に飼料倉庫を建設、飼料販売事業に乗り出していった。十二年に第一期の長都酪農郷づくりが終了したことを記念して「家畜報恩碑」が建設され、以来毎年七月十五日に家畜感謝祭を挙行している。

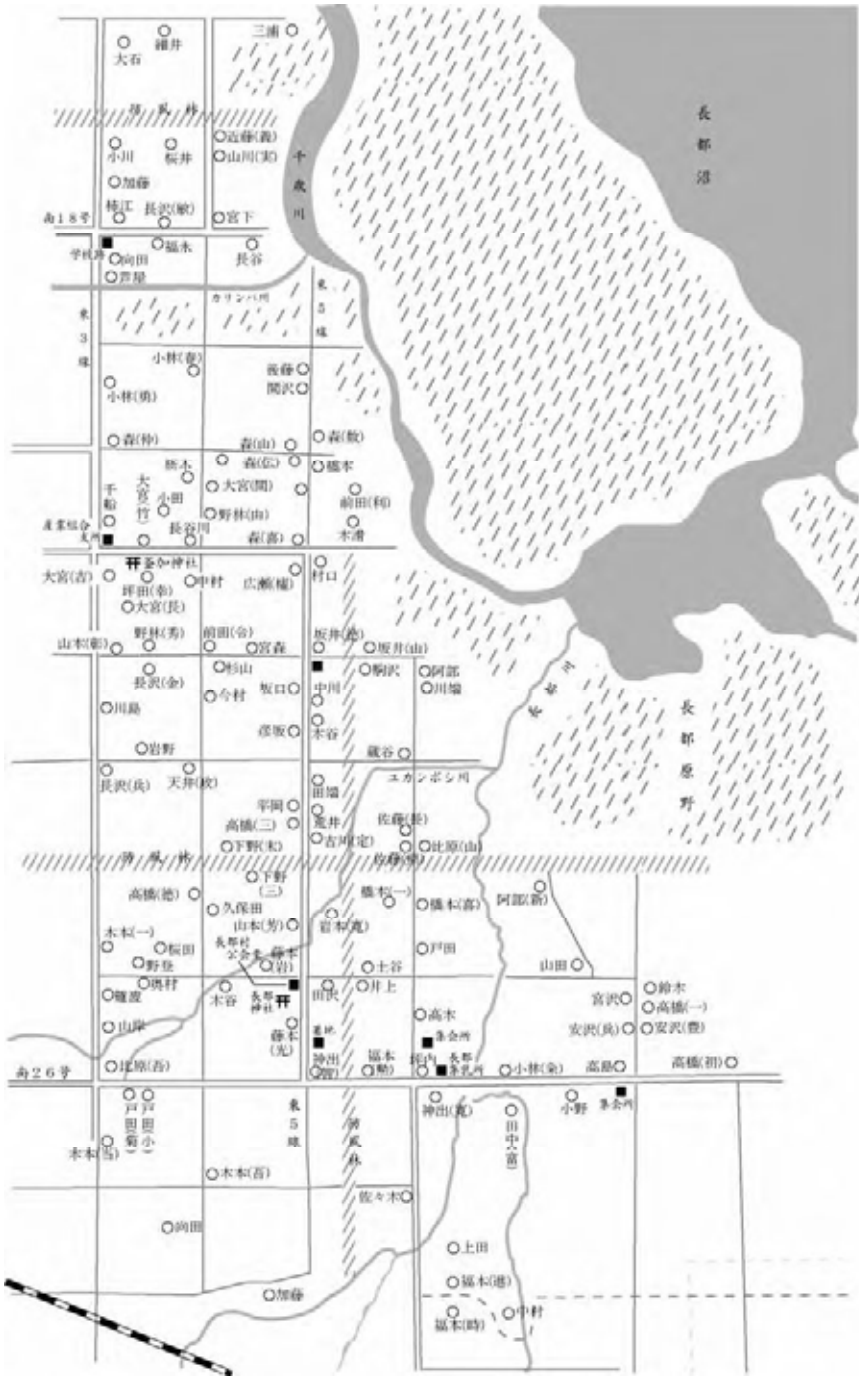

図-3 昭和 10 年頃の長都・釜加（『長都小学校百年史』より作成）

（二）カマカ（釜加）地域への入植

この地域も古くからアイヌの人々が住んで鮭漁をしていた。和人がカマカに入ったのは、明治五・六年頃、当時は鬱蒼とした森林でたくさんの木材が伐り出され、カリンバ川、千歳川を経て、江別・札幌方面に搬送されていた。当時の木こりは五年・一〇年単位で森林が無くなると同時に居住地を変えほとんどの和人が永住することはなかった。後述の野林良蔵もそのうちの一人であった（カマカの古老の話）。伐採後、一部蕎麦を中心とする自給用の畑作物も作られ

ていた。明治十年代、千歳川の畔（東五線南二〇号）で、鮭漁を中心とする漁場を開いていた新保清次郎が守り神を祀り、漁期には近隣から大勢の人が集まり賑わっていた（『千歳市農業協同組合三十年史』）。

カマカの古老の話によると、新保清次郎は明治十四年明治天皇御巡幸の折りには、千歳に在住しており、一五人の従者を自宅に受け入れている（『千歳市史』）。同時にカマカにも居を構え、建築と木を伐採し枕木に加工する木材業をしていた。

鮭漁では、当時の捕魚車（インディアン水車）を、明治二十九年、千歳神社近くに構築したが、十二月に入り着氷のためしばしば停止するので、夜通し見守る要員が必要であったが、結局十二月十二日に中止することとなった（『北海道鮭鱒ふ化放流事業百年史』）。カマカの古老の話では、大工の経験のある清次郎は着氷を防ぐためにインディアン水車に水を掛ける仕掛けを改良装着したとされている。

前田歳近が明治二十二年に新保清次郎の所に草鞋（わらじ）を脱いで、長沼のフシコベツ（今の舞鶴）に移って新保漁場を手伝っている。前田はカマカには大正十年に移転している。明治二十七年頃に、野林良蔵、田坂種次郎、杉山茂平が、二十八年三月に山形与三八、三十一年大宮間右衛門、三十二年坂井平右衛門が入っている。

昭和五十九年、当時のカマカの古老たちに新保清次郎について、佐々木が聞き取りしたものを次に記す。

（昭和五十九年三月　釜加第二集会所）

話し手・前田利次、森由太郎、坪田儀一、森秀雄、間沢ユキヱ（旧姓山形）、間沢竹二、間沢幸三、前田令雄

聞き手・ＪＡ千歳市　佐々木昭、梅尾要一

記　録・半谷保典

（略）

森（由）　溝口（千歳神社宮司）とミヤケ（宮城米次郎で当時地元ではミヤケと呼ばれていたようだ）とがケンカしたので忘れない。ここ（釜加）の神社の祭りは四月十四日だったから、十四日過ぎたら、黙って大黒さんだか恵比寿さんだかみたいなやつをおいて、神様（祠と厨子）を背負っていったのを見つけたのがミヤケだった。

前　田　ここ（新保清次郎のところ）に社を建てたのがどうしてもわからない。場所はわかるが年代さ。俺のところはここへは大正十年だけど最初は明治二十二年にフシコベツ（今の舞鶴）で、まず新保に草鞋を脱いだ。二週間ぐらい新保にお世話になってフシコベツに小屋を造って移った。しかし社のことは聞いていない。

森（秀）　清次郎は岩手の人で、清太郎は息子。

森（由）　秋味を主に狩猟（ママ）していたものと聞いていたが、あれは木材業だったんだな。傍らに大木を切って枕木をとり千歳川から江別に流していた。秋味も捕っていたけど、監視がきつくなりこれ以上の秋味捕りは見通しがないと言うことで、当時まだまだ沢山大木のあった島松沢に移ることを決意し、ここに見切りをつけた。

間　沢　アイヌのようで髭が生えていた。

森（由）　明治三十八年に今の釜加神社の所へ持って（移転）来ている。向こう（島松沢）に行く一～二年前に、新保が相撲を我が身一人で華（金）を出して盛大にやっている。それを一回見に行った。

前　田　そのとき、長岡源次兵衛、滝川弥兵衛等二〇人ぐらい来ていたという。俺のところの爺（前田歳近）さんが、新保に呼ばれて、こういう訳で今度神様を勧請するので、ここへ来てくれと言われて、こっちで千歳の有志を迎える段取りをしていた。

森（秀） 長谷川の婆やがな、俺の前の家、新保の前にあった時、あの建物が出来るのに二年もかかって建てたと言うんだ。柱は皆手挽きだった。窓なんかにこんな格子戸が入れてあった。そして蔵があって大水がついたときに、浮かしてここまで押して来て置いたっていうんだ。あの時分に火山灰を固めたコンクリートだって言うんだ。その頃ここに瀧野と由良というのがおった。由良カイモン。

森（由） その頃、杉原、中村、由良、星野、川本というのもあったな。とにかく野林さんが入ったときには、杉山・田坂さんしかシャモはいなかった。あとは全部アイヌだった。

前　田 とにかく大親分であったらしい。

森（秀） 千歳神社から本尊さんを持ってくるぐらいだから。

間　沢 したけど千歳神社に祀っておる神様をこんなところへ持って来れたもんだ。なんぼ新保さんでもあっちにも偉い人が沢山おったのに。何かあったんだろうね。

前　田 いや、それは神主が懐が困っていたのでしょう。あの頃神主さんは溝口さんだった。秋に借りていっては、二月に戻す時に、二打（二四本の塩引き）をつけて、また借りては戻すのが、五～六年続いた。そして面倒だからご本尊は俺が守ると言うことになったんではないか。だけどあれは二つの神様なんだよな。郷社としては早くに認定になっているが、道の神社の監査を受けるときには二つなければ通らないわけさ。それで（千歳神社の）溝口宮司は持っていったわけ。

森（秀） ゴトのキョシ（後藤　清）さんがさ、「ここの神さん、弁天さんていってたけど、おらがみたときは、大黒さんしかなかったぞ」って言うんだ。やっぱり何かするときに神主が持っていくんでないか。（以下略）

新保清次郎が自宅敷地に御堂を造り千歳神社から、鮭の守り神として弁財天を預かり、祀っていたのは、明治二十五・六年頃から、現在の釜加神社の地に移した三十八年まで約一五年間である。移転後も、餅撒きや相撲大会を全て自費で振る舞っていた。当時は長都村、漁村、島松村にも祭りらしい催しはほとんど無く、大変なにぎわいであったと語られている（カマカの古老の話）。

釜加への入植者一覧（『長都酪農組合五〇年史』）

入植者	入植年	出身県	入植地
野林　良蔵	明27	福井県	
田坂　種次郎	明27	岩手県	
杉山　茂平	明27	岩手県	
山形　与三八	明28	福井県	
木谷　源七	明29	石川県	
大宮　間右衛門	明31	富山県	坂野吉太郎跡地
坂井　平右衛門	明32	石川県	
栃木　ヌサトクル	明38	北海道	ネシコシから明20代にハイタナイ（幌内）へ移住し再入植
千舟　トロフヌ	明39	北海道	
橋本　梅太郎	明40	徳島県	新保清次郎跡地
中川　力松	明40	石川県	
長沢　秀太郎	明40	富山県	奥田兵太郎跡地
森　美代蔵	明40	徳島県	
坪田　幸次郎	明42	富山県	
川島　圭吾	明44	富山県	杉本七郎跡地

学　校 明治の後半から大正にかけて、釜加地区の農家の農産物は大

半が恵庭に出荷されていた関係で、子供達の通学も一番近い松園小学校（西二線南二二号）に何の抵抗もなく越境通学をしていた。しかし通学区域の学童が増えるにつれて、他村の生徒の締め出しに合い、やむなく大正十五年に釜加特別教授所を東三線南一八号に設置し収容した。その後、昭和七年に新しく学校敷地を東五線南二十二号に求め、従来からの長都の校舎と釜加の教授所を廃止して新校舎を建設した。

千歳地方における最初の産業組合　明治三十三年公布の産業組合法に基づく千歳地方の産業組合の第一号は、大正六年九月に設立された「長都信用購買販売組合」（十四年に解散）で、大正十二年から昭和十二年まで釜加に「釜加配給所」として設置されていた。その発起人代表は漁村の河尻与九郎であったが、発起人には、釜加の坪田幸次郎、前田孝二郎、小前梅次郎、田坂久造、杉山小太郎が名を連ねている。当時の島松村、漁村、長都村の農業経済事業の中心は、釜加・中恵庭地区に集中し、彼らは地域のリーダーとして活躍していた。後の恵庭市農協の前進「有限責任漁中央信用購買販売利用組合」より、釜加地区の関係者が組合運動功労者として表彰を受けている（『千歳市農業協同組合二十年史』）。

（三）上長都地域への入植

オサツ川、ポンオサツ川の上流一帯を、明治時代は長都川上、大正年代に上長都と呼ばれるようになった。この地帯も火山灰地で地味が悪く入植者が住み着くようになったのは近年のことである。

恵庭村島松の福本富太郎所有の炭焼林一八〇町歩を、寺田助太郎ら六戸が、昭和六年に北海道民有未墾地開発資金の融資により取得し、炭焼をしながら開墾をした。当時の未墾地資金償還組合員は次の通り。

寺田助太郎　昭和二年来道、札幌三里塚、恵庭漁太を経て六年入植
北村　五郎　札幌円山、恵庭村茂漁にて酪農、十三年に入植
米沢吉次郎　中恵庭にて稲作経営を経て入地
本郷良喜次　札幌市白石を経て昭和六年入植
大丸久之助　夕張炭鉱を経て入植、炭焼
佐伯　定助　恵庭で材木業を営み入植はしていない

道　路　昭和八年長都川沿いに道路建設を願い出、寺田助太郎を責任者として北海道道路建設補助事業として着手。

乳牛の導入　昭和一二年に寺田助太郎が、長都の木谷健美より仔牛二頭を長都の戸田菊次の保証で購入。一三年北村五郎二頭、一四年恵庭村柏木安宅一義が一頭を伴い入植した（『千歳市農業協同組合三十年史』）。

二、千歳村の開拓

（一）末広地域への入植

千歳市街の中央を流れる千歳川の北側と、北西に連なる小高い丘に囲まれた形が扇子に似ていることから近年末広と呼ばれるようになった。以前は北東部が子スコシ（西越採卵場付近には遺跡が多く残っている）、北部を千歳村番外地もしくは東〇〇線南〇〇号と言われた。

この地域への入植の始まりは、十七年、山口県から移住してきた廣重兵蔵と息子彦十郎・定次郎・逸太郎と言われている。

その後の入植者には、木滑英策、国分吉五郎、佐々木兵記の名があげられ、更に、稲川儀作、藤本初八、藤本岩太郎、村中某等々の名がある。いずれも、水田農家であったが、一面森林と原野であったため、木炭づくりも重要な副業として、現金収入（生活費）に充てられていた（末広の古老の話）。

西越採卵場　千歳川を遡上する鮭の親魚の捕　獲は孵化場前で明治二

写真-2　千歳採卵場

十八年まで続いたが、下流での密猟者が絶えないことから、北米で使われていた水車型の捕魚車を二十九年に千歳神社の所に設置し漁獲を開始した。

しかし、回転が十分でなかったので、改良を加え、三十年から下流の子スコシ（西越採卵場）にて操業され、当時地元で大工をしていた新保清次郎が、この採卵所の建設を請け負い建築することとなった。以来末広地域に居住していた廣重彦十郎・逸太郎兄弟と彦十郎の息子兼太郎、紺野慶蔵、国分美作等が採卵場の管理を任されている（カマカの古老の話）。

千歳川を遡上する鮭の保護のために、千歳川から取水する水利権の確保が、非常に困難な時代であった。しかし当時の千歳の水田耕作熱は盛んで、石山七三郎・廣重彦十郎外六名が明治二十八（一八九五）年「用水溝開鑿願い」を北海道庁長官に提出している。許可を得て用水溝の開鑿をしたが、当時の測量技術の未熟さから水が通らず、取水地（蘭越）で、千歳川を堰き止め嵩を上げて通水した。

その用水路が千歳市街を縦断し、永く用水通り（管理用道路も併設）と称

写真-3　採卵風景

され親しまれてきた（『千歳市史』）。

鉄道（千歳線）の開設

明治二十五年に既に室蘭から岩見沢までの室蘭本線が開通していたが、大正五年当時室蘭港を中心とした胆振・日高・金山地域の鉄道開発と、海運業界が小樽を中心に発展していたことから、沼ノ端・苗穂間の私鉄建設の気運が高まり、大正九年に認可、測量の後、用地買収、十三年に沼ノ端・月寒間、十五年に月寒・苗穂間も完了し八月に北海道鉄道札幌線として全線開通された。停車場は、美々と千歳の二ヵ所で、市街地を分断する鉄道が敷かれ、『末広』地域となった。

千歳線と呼ばれるようになったのは、国鉄に買収された昭和十八年のことである（『千歳市史』）。

（二）アウサリ（阿宇佐里）地域への入植

「美々は、昔、勇払・千歳・札幌を結ぶ交通の要路として開け、文化四（一八〇七）年頃から道路を改修して、車馬の通れるようにした」とある（『駒里開基九〇年史』）。安政元（一八五四）年頃には、樋平越新道（今

図-4　石山七三郎外７名自費開鑿用水各図

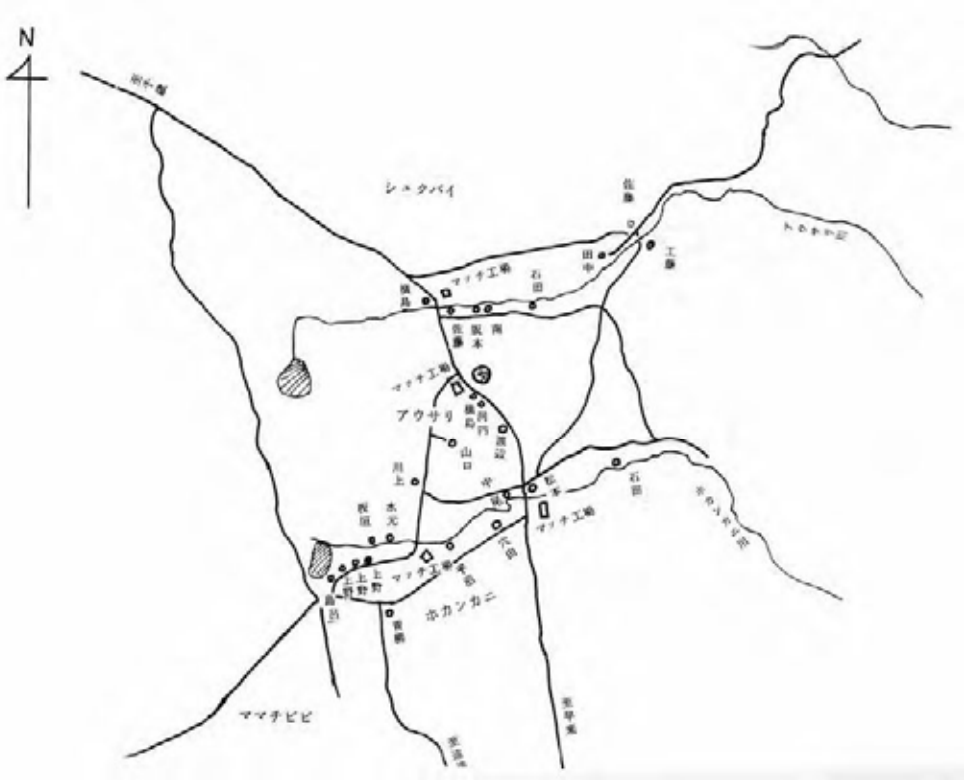

図-5 明治時代の駒里

の豊平越）が造られたとあることから、一五〇年以上前から北海道の交通の要衝であったことがうかがえる（『同前』）。

当時、千古斧を知らぬ大密林で、熊、鹿が横行し、白鳥、青さぎ、鶴、鷲などが生息していたという。美々川支流のパンケビビ川流域で、一七～一八世紀アイヌ文化期の船着き場、建物跡などが発見されている。その頃の産物としては、鹿皮、熊皮、熊胆、鷲の羽などであった。

古老の新藤のお婆さん（明治二十六年生）、穴田の婆さん（同三十年生）、松本源吾（同二十九年生）、大蔵長蔵（同三十八年生）、西条忠光（大正三年生）らの話によると、明治十八年頃、横島徳太郎という人が、札幌郡山鼻村から来て国有地の払い下げを受け横島農場を創設したのが入植の始まりのようである。また、同時期に大原力松、田中銀蔵も入地していたようだ。

横島農場の開墾した農地は約六〇町歩で、当時の農耕法は樹を切り倒した後を鍬で表土を耕し、ちょうど座布団を二つ折りにした状態で両側から合わせて畦を作り、この上に作物の種を蒔いた。こうした形跡は今でも散見できる。

当時の集落の様子は、現在の松本家の横を流れるホカンカニ川沿いには主にアイヌの人たちが住み、武田、中村家の横を流れるアウサリ川に沿っては和人が多く住み着いていた。樽前山の噴火による火山灰が地表を厚く覆っており、地味は悪かった。

マッチ軸木工場と渋液工場　明治の初期は、熊、鹿が多く、その皮の鞣（なめ）しや缶詰製造も盛んであったが、三十年頃、樹林地に沢山自生していたドロの木を使った燐寸の軸の製造工場が造られ、その跡地が今の学校敷地になった。明治三十五年、東京の桜組合資会社が、この地で産出される柏の皮から出るタンニンエキスを製造する製渋工場を早来村に造った。国内最大規模で、製品は漁網、皮革加工の原料に用いられ、マッチ工場と並び活況を呈していた。また樹木の活用と農業収入を補うための木炭づくりも欠かすことの出来ない産業であった。

マッチ工場は、明治三十年から三十四年頃が最盛期で、原料の枯渇と

共に三十九年には閉鎖され、渋液製造も三十五年から四十四年までで終わった。

道　路　二十五年に北海道炭鉱鉄道が室蘭・岩見沢間に開通し、二十七年に早来駅が出来ると、産業経済面での流通に大きな変革をみることとなった。特に経済面における人的交流も日常生活用品の購入もほとんど早来で行われていった。もちろん、車馬による交通手段が大半で、フモンケの悪路があっても近い早来に出向くことが多かった。また、千歳へ行くには祝梅地域を通り千歳川淵を上下する川舟の船着き場までのルートしかなかった。

学　校　先に紹介した古老の話では、明治三十一年頃、横島徳太郎は、大変教育熱心で自宅の一室を解放して寺子屋風の教育の場（私塾）を設けたと話されている。児童は十数人で、黒田重太郎が教育に当たった。更に、明治三十三年に千歳尋常小学校の分教場として認められたが、別に松本長太郎の自宅でも教育塾を開いたという。

写真-4　大正年代のアウサリ小学校（運動会記念）
『記念誌・駒里』より

明治三十九年、阿宇砂里簡易教育所として、現在の駒里小中学校の場所（マッチ軸木工場跡地）に新校舎を建設し、公的教育機関としてスタートした。

大正六年に簡易教育所から阿宇砂里尋常小学校となり、大正八年三代目校長上村秀一が初めて専任校長として着任した。

神社仏閣　美々から当時の八幡神社を分神してアウサリ神社を建てたが、すでにホカンカニ川近くに法華宗の布教堂とホカンカニ神社が建てられていたため、二つの神社があるのはどうかということで現在地に合祀し、アウサリ神社とし地域の中心となった。地域の宗教はほとんど早来の寺院と関わっていた（『記念誌駒里』）。

畜産酪農の発達　厚さ一㍍以上にも及ぶ火山灰のもとでの農耕は有畜農業以外に途はないとして、西条忠光が大正二年に、エアシャー種の牛二頭を導入、続いて石田六三、穴田某もこれに続いた。また、横島牧場跡地に入植の宮脇は、丸太の半割で牧柵を作り、めん羊二〇〇頭を飼育しアウサリの有畜農業の基礎を作った。

その後、徐々に乳牛飼養者が増え、昭和二年に松本賢次が長となって酪農組合を組織し集乳所を設け、クリームを分離して輸送缶に入れ、美々駅から雪印札幌工場に出荷した。五年頃は飼養農家も、松本・坂垣・大蔵・西条・中尾・水本と増え、長都に次ぐ酪農地帯となった。

昭和八年遠浅に酪連のチーズ工場が出来てからは、生乳のまま馬車で出荷されるようになり集乳所は閉鎖された。以来十九年に千歳に雪印集乳所が出来るまで続けられ、多いときには三十数本の牛乳缶が出荷された。

基地の建設　昭和十七年頃から現在のアウサリ川上流北側に、海軍航空基地の建設工事が始まり、地区内に人夫小屋（飯場）が立ちにぎやかであった。又、戦時体制の中、地域の若者は連日飛行場づくりにかり出された。（『記念誌駒里』）

（三）子シコシ（根志越）・シュクバイ（祝梅）地域への入植

地名の由来　いずれもアイヌ語で、ネスコシ（クルミの木の群生する

ところ）、シュクバイ（成長した・イラクサ）の意が通説となっている。

地域の開発　かつて、マオイ沼に注ぐシュクバイ川は、ユウフツとイシカリの境目といわれていた。明治二十五年の室蘭線開通以前は夕張（長沼・由仁・栗山）郡へは千歳からネシコシ・シュクバイ・キウス・ケヌフチ（後の由仁街道）を経て入村したとされる（『長沼町九〇年史』）。

ネシコシ地域には早くからコタンがありアイヌの居住者が数多くいた。『北海道旧土人保護沿革史』によると、七戸三四人とある。

明治二十七年に号線によらないネシコシ、オルイカ、ケヌフチの千歳原野殖民地区画割の完了とともに、ネシコシに入植を出願した福井県団体（団体長関喜左衛門）が同郷者六〇余戸とともに本道に団体移住し、現地に入地した。しかし、あまりの泥炭湿地のため「開墾の見込みなし」との理由で三七戸が即帰郷或いは離散した。残った二五戸も数年中に離農し最後は喜左衛門外二戸となる結果であった。湿原に入り幾度もの大水害を克服して用水溝を開鑿し開田した結果、明治四十年には良い田は一反歩六俵、平均三俵半にも達し、かなりの蓄えが出来た（『千歳市史』）。後にこの地域もかなり開田し、その水利を安定させるために多くの水量をママチ川に求めることとなる。

ママチ川に水利権　シコツ一六場所の一つでママツフトという地名をとってママチと呼ぶようになった。当時はかなりの水量を有していたようである。ママチ川は、遠く藤の沢（フブネウシママチ川のある沢）に源を発し、チトセ川に平行、市街地まで流れているが、大正十三年に廣重定次郎が、根志越用水組合長となり、五〇戸で、約二一〇町歩の水利権を取水し水田耕作につとめた。この頃の様子を島倉チトセは次のように語っている。

（昭和五十二年　聞き手・・榊原武雄、長見義三）

問い　大正年代頃のママチ川は相当深かったんですか．舟があがれるくらい。

島倉　あそこに落ちて死んだ子供は沢山いる。丸木舟はたまにあったがそんなに大きくはなかった。新保が旅館をしていた頃は上って来たっていうからね。

問い　滝川さんが堰をしたのはだいぶ後のことですよね。

島倉　そう、だいぶ後。滝川亮次さんは新保の兄と一緒に徴兵検査にいった人だから。

問い　きっと下も上も（室蘭街道）ヤチ原だったんでしょう。

島倉　あの隊網（飛行場の金網）まで。

問い　灌漑溝付近まで？

島倉　そうそう、あの辺までヤチだった。あそこは昔、よく運河っていっていた。長沼灌漑溝の出来る前から用水があったんですよ。

問い　ヤチの中を掘ってあったんですね。当時の地図に水のある地図をもっていた。誰か田んぼを作っていたのかなあ。

島倉　田んぼは、今の遠藤病院の裏、新保の土地で、中川さんが作っていた。・・・・云々

以上の内容から推測すると、現在の本町（中川）、朝日町（橋爪）には、かなりの水田があったのと、南長沼用水の引かれる以前に自然に流れていた用水もあったものと思われる。又、文中にでてくる滝川堰は、後に根志越用水組合が堰上げをして多くの水田を耕作し、後の根志越水稲団地の礎を築くこととなった。

主な産業としては、水稲が主体ではあるが、蕎麦などの畑作も、自家用としてかなり耕作されていた。なお、力示・廣重等が長都の戸田牧場から乳牛を購入し、飼育されていた（『千歳市農業協同組合三〇年史』）。

学　校　大正九年十二月、根志越青年倶楽部（現在の根志越神社）に千歳小学校の分教場が設置され広く末広地域からも四年生まで通学した。翌十三年四月、千歳小学校分教場根志越特別教授所となり、昭和十六年四月に千歳第二国民学校と改称される。分教場時代の児童は全員が着物姿で履き物は下駄・草履で、鞄などはなく、皆が風呂敷包みを背負っていた。冬の吹雪の通学は大変で部落総出動して通学路を開けた（『千歳市農業協同組合三〇年史』）。

神　社　根志越八幡神社は明治三十四年九月十日建立で、天照大神、大己貴命、小名彦命、植定姫命、倉稲魂命が祀られ、米の豊穣を祝って有志が建て年二回春秋に祭典が行われている（『千歳市農業協同組合三〇年史』）。

（功労者）

關喜左衛門　明治二十七年福井県より入植し水稲の作付けを主に定着する。自ら根志越用水組合を起こし組合長に選任される。千歳村会議員、千歳村初代農会副会長、根志越神社氏子総代、千正寺初代檀家総代頭を歴任。

廣重定次郎　明治六年山口県に生まれ同十七年父重蔵と共に渡道、北海の天地開拓を志し、米作農業に従事する。同時に灌漑用水をママチ川に求め、自らも、關組合長のあとを受け継ぎ、根志越用水組合長となり地域の農業水利の恒久化を図った。千歳村会議員、区長を歴任。札幌外四郡農会長・千歳村長より精農者表彰（『三村銘鑑録』）。

（四）オルイカ・キウス（中央）地域への入植

地名の由来　この地域の地名はいずれもアイヌ語から転化したもので、オルイカ（川口・橋のある沢で、丸木舟で川を渡ったところ）、チプニ（熊の爪跡の木があるところ）、キウス（ヨシ・カヤの群生するところ）である。

地域の開基　この地域の開拓は、明治二十四年、由仁街道（現国道３３７号線）開削に始まり、由仁、長沼、栗山へ通じる交通の要衝となる。この道路と安平山系を源とする「オルイカ」、「チプニ」、「キウス」の河川流域も、往時は大木がそびえクマイ笹が茂る密林であった。人々は鋸、鎌、鍬で、開墾し、農産物の作付けをしていた。

最初に名前がでてくるのは、明治二十六年おそらくチプニ川あたりに入植した村田重助、木村寅蔵である。さらに、三十年、堀常右衛門（三反一畝）、長瀬多八（一反六畝）らの寄進による八幡宮乎留神社、三十三年、関口家所有地に木臼簡易教育所などが建てられた。

由仁街道沿いに関口、堀常右衛門、長瀬多八、亀井、井川、生田らがいて水田を耕作していた（大正七年、関口・村田・長瀬・木村らによりチプニ川からの水利権一九町歩が取得されている）。

キウス川付近に鈴木、沢田、田中、秋島久治郎、高橋和喜蔵、富田などがいて水田耕作（大正十二年に秋島久治郎外三二名で三三町歩の水利権を得ている）をし「道路の何々さん」と呼ばれていた。また、オルイカ川流域と長都沼周辺には、大正五年頃、市村・山本漁場を中心に開墾が進められ、大正二年に、市村政五郎外一五名により一一五町歩の農業水利権をとり、開田をし、更に、酪農も取り入れ農業生産の隆盛を図った。また長都沼方面には菖蒲、片岡、樺沢、玉木、坪井、吉田がいてこの周辺の人々を「沼の人」と俗に言っていた。一方、丘陵地帯には、昭和六年に政府が民有未墾地買い入れ資金を融通し、民地三一二町歩を開放、一二戸が入植し開墾に従事した。小牛田、中村、荒井、樺沢、中易

図-6 昭和初期のオルイカ・キウス

らは入植地の地理的条件が悪く、離農者が続出し、再び元の未墾地と化した。この地帯の人は未墾地の人と呼ばれている。

由仁街道（明治二十四年開通）が開通して、由仁は勿論、長沼・栗山への交通の要衝となる。

追分道路は、官林道路とも言われ田中牧場に通じる所で、チプニ川があり、この道路沿いには杉森、佐々木、水留がいた。

高木悌次郎と千歳牧場　現在の中央地域の南東部丘陵地帯は、明治の初期から国の御料地として位置づけられ、大木の生い茂る原生林であったようである。その後国策により、牧場として開放され（『千歳市史』には八一万坪を大画とし牧畜農場用に貸下げするとある）、滝川彌兵衛による滝川牧場、長沼在住の高木悌次郎・森井平兵衛らによる千歳牧場となった。しかし滝川、森井は火山灰が厚く成功の目処が立たないとしてかなりの土地を高木悌次郎に譲渡した。高木はそこに第一・第二・第三の牧場を設置した。折しも明治三十八年、長沼では水田開墾の機運が盛んで、長沼と広島に通ずる灌漑溝掘削工事を請け負っていた鈴木六三郎が管理を任され、その功が認められ、一括譲渡されることとなった。

高木は由仁の先駆者古川浩平に仕え、農場を手伝う傍ら夕張川からの用水路を長沼に引き、認められて長沼村村会議員となる。議員から収入役となり三十八年に村長になっている。その間自ら長沼土功組合を設立させ、千歳川上流からの取水計画をいち早く国に申請をし、今なお千歳を縦断している南長沼用水路が現存する所以となる。村長退任後は専ら土地改良区設立に翻弄しその成果が永く讃えられ今日の穀倉長沼の礎となる（「鈴木清子の当時の記録メモ」『長沼町史』）。

湖　沼　オルイカ・チプニ・キウス・シュクバイ川は、下流で旧長都沼周辺に流下し、その周辺には葦などの繁茂する沼沢地となっていた。

そこに漁業権を得て操業していたのが、市村漁場の末永缶詰製造所で、豊富な「フナ」「ワカサギ」で「すずめ焼き」や甘露煮を作り札幌の市場に出荷されていた。他に山本、中村などの舟着き場もあり盛況を見ていたが、戦後しばらくして湿原の水位も下がり漁業は終わりを遂げた。

度重なる水害と食糧増産の機運により、長都原野の干拓の兆しが見え、昭和十六年全国大学義勇軍による長都沼と千歳川を結ぶ排水路、大学排水路の掘削となり今日もその名を残すこととなった。これが渡部栄蔵による「太平洋放水路構想」である（『中央小学校開校八〇周年記念誌・高橋知夫投稿文』）。

名所・旧跡　**「キウスのチャシ」**　史跡名勝天然記念物「史跡キウスのチャシ」（昭和五年六月道庁告示第八四四号）が「旧土人の城址」と掲示された絵葉書にて公表された。明治二十二年に由仁街道掘削で、五個の円穴のうち二個の中央部が破壊されたが、その後の調査で五輪マークのように連結されていることがわかり重要な史跡となった（『千歳市農業協同組合三十年史』）。

神　社　オルイカの神社は、明治三十年旧暦九月十五日八幡宮乎留伊賀神社という名で建てられた。当時の寺子屋の教師を務めた阿部暁円師のはからいで現在地に建てられた時のエピソード、神社の場所決定に際し暁円が樹齢三五〇年のニレの木に降りた天狗にお伺いを立てオルイカと決定したという話は、地元の語りぐさになっている。その後、堀常右衛門から三反一畝、長瀬多八から一反六畝の寄付を受け、近くに学校も建てられることとなる。境内のえぞ松を明治三十三年に亀井又平、イチイ（おんこ）を大正五年頃に久保丹吉、鳥居横のえぞ松は、昭和十六年に堀武雄がそれぞれ奉納植樹されたものである（『千歳市農業協同組合三〇年史』、『中央小学校八〇周年記念誌・木村籐三郎投稿文』）。

水谷農場　現在は陸上自衛隊東千歳駐屯地となっている。旧千歳海軍航空隊第二・三基地は、大正十四年に小樽でニシン漁場を営んでいた長尾重太郎が竹内牧場から買い受け、鰊の不漁と将来の木炭業を夢見て牛・豚・羊を飼っていた地域である。昭和に入り大勢の人夫を入れ耕作していた矢先に、札幌税務所とのトラブルに巻き込まれ競売に付されている。

当時、大阪で製パン業を営み「マルキパン」と称して東洋のパン王と言われるまでに成功していた水谷政次郎が落札した。

水谷は小麦粉の自給確保と理想農場を夢見て、十勝西足寄（一〇〇〇町歩）、丸瀬布村（市街地の大半である一五六町歩）小清水村（五〇〇町歩）で大型機械を駆使した農場経営をしていた。（平成二十一年三月　丸瀬布町史編纂室長　秋葉實より聴き取り）。

千歳農場（五〇六町歩）は昭和十年に開設、地元農家の協力を得て小麦の生産を始めた。しかし春蒔き種であったため、火山灰地で地味の悪い千歳地方では、パン製造には適さない等外品しか出来なかった。その後馬鈴薯にも挑戦し澱粉工場までも建設したが、赤字の連続であったために、当時、軍備拡張に奔走していた海軍に土地のすべてを寄付してしまった。水谷の当時としては画期的な大型農業と小麦の栽培技術に掛けた情熱は夢幻と化してしまった（「マルキパン物語」『北海道新聞』二〇〇八年十二月二日）。

（功労者）

村田重助　明治二十六年広島県より渡道し、広島村に一時滞留、同年オルイカに転じて水田耕作に成功、後に率先してチプニ川の水利権を取得し、土地改良・耕作技術の会得により、札幌外四郡農会長表彰を受け、

村の総代・部落長など多くの公職を歴任した。特にキウス小学校建設には率先私財を投入し、永く後世に名を残すこととなった（『三村銘鑑録』）。

鈴木六三郎　明治四年福島県会津で生まれ三十八年まで野村銀行会津若松支店長を務めていたが、時あたかも世界恐慌の煽りを受けた幣価切り下げ事件で辞め、妻リヨと共に渡道した。長沼村の村長であった高木悌次郎のもとで灌漑溝工事を請負、翌三十九年同氏所有の千歳村オルイカの牧場管理を任される。

オルイカの牧場は第一・第二・第三とあり「千歳牧場」と言われていた。四十年に第一・第二、四十二年に第三の牧場が完成、成功すると同時に高木悌次郎から、悌次郎の妹が明治天皇より戴いたという茶器一組が贈られている（写真-5）。さらに、その功が認められ、牧場全部を譲り受けることとなり、四十三・四十四年に買い受けと同時に移転登記がなされている。

四十年にキウスに移転後、農業の傍ら林地の管理に当たり農会総代、産業組合長、キウス小学校保護者会長、村会議員などの要職を歴任し、地域の発展に寄与した（前掲「鈴木清子メモ」、『三村銘鑑録』）。

写真-5　明治天皇からいただいたという茶器が収納されていた木箱

市村権太郎　明治三十二年にオサツトウの船着き場に移住、農業に従事し、開拓改良をなし、オルイカ・キウスの発展に尽力した。傍ら、沼の漁業権を取り、隣にいた末永と協力、鮒・ワカサギの甘露煮佃煮など、地域の漁業産物の振興につとめた。また、地域の人望も厚く、農会代議員、オルイカ潅漑溝組合長、森林防火組合長、村会議員なども歴任し、自治発展のために寄与された（『三村銘鑑録』）。

（五）ケヌフチ（剣淵）への入植

地名の由来　ケヌフチはアイヌの人たちが狩猟・採取のために歩いた土地が永い年月の間に、葦原が泥炭化し、そこに水に強いハンの木が育った。ハンノキは皮を煎じると赤い液が出るので、血の木として、多量の出血のあった時に補血の意味で服用した（『分類アイヌ語辞典』）。ハンノキ-（群生）する河口。

入植の経緯　ケヌフチ川は流量も多くたびたび氾濫を繰り返していた。支流のトビウシュナイ川、ポロナイ川は開田のための水利用水として活用された。マオイトー（馬追沼）は、ケヌフチ川の延長で魚介類（鯉、鮒、エビ、烏貝など）の宝庫であった。マオイトーとオサットー（長都沼）とをつなぐイカベツ川は勾配が少なく長都沼の水位が上がると逆流する川であった。

ケヌフチ原野への入植は、明治十年代である。二十年、高橋久蔵が初めてこの地に足を入れた頃は丘陵地は原始の密林、マオイトーは、ヨシ・スゲ・アシの大草原であった。二十二年に着工の千歳由仁道路の開通により、本州の経済不況を背景に、進んで新天地を求め往来する人が多くなった。それより先、二十年頃に長沼村開祖吉川鉄之助、角田村栗山の

開祖泉鱗太郎も千歳の新保宅経由で、由仁道路（ケヌフチ）を経て入地している。当然ケヌフチにも入植者が見られるようになった。前述の高橋久蔵を始め、二十二～二十三年頃、野元源蔵、日沢吉雄、片小田英吉（奥村）が入植し、何としてでも自己食糧、米作りを成功させようとの熱意で水田耕作が始まった（『千歳市史』）。

さらに、二十七年五月信田太七、同年六月信田喜一、二十八年鈴木直三郎、三十年五月富田文助、同年小栗経治、三十一年清水市三郎等が入地している（『郷土誌ケヌフチ物語』）。

また、『千歳市史』、『千歳市農業協同組合史』によると、二十九年坂田清平衛、同年森井平兵衛、三十年以降彦坂与太夫、今井助左ェ門、山城鶴次郎、新伝与次郎などの名がある。

二十六～二十七年頃の入植者は、開田・開畑が中心であったが、冬期間は、生計を立てるために山仕事に従事していた。さらに、造材業・炭焼業に転ずる人も数多くいた。山城鶴次郎もその一人であった。

道　路　千歳由仁道路は、明治二十五年室蘭線の開通を目論んでの着工であったようで、二十二年に起工し翌二十三年八月に竣工している。同時に岩見沢・角田道路も開通したので、千歳・岩見沢道路とも言われ主要道路となった。この道路とケヌフチ・トビウシュナイ川に架かる橋が、丸太の上に板を敷き詰めた簡単な橋で、馬が通るたびにガタガタと言うことからガタンガタン橋と言われていた。

千歳追分道路は、由仁街道からケヌフチ川沿いに追分に向かう道路であったが、当時はひどい湿地帯でとても歩ける状態ではなく、現在よりケヌフチ川左岸の山の方の高いところを通っていた。二十八年に一部改修され、また三十六年に再改修されている。

繁殖道路は明治四十年長沼舞鶴（繁殖）から由仁街道までの連絡道路として開削された。この地帯は二十二年道庁令により、鶴の繁殖地として指定され、捕獲を禁止されたところから繁殖と呼ぶようになった。この間にイカベツ川があり、ここに木橋を掛けていたが低地帯であるために毎年補修されている。ここは丁度、胆振の国と石狩の国との国境であることから、今でも国境橋と呼んでいる。

高橋道路はケヌフチ川の西方由仁道路の千歳寄りに、北に向かう道路であった。明治二十三年ごろ高橋久蔵がこの地に入地し小屋掛けをした場所に通じる道路で、今でも高橋道路・開拓道路と呼んでいる。

船　便　イカベツ川は、由仁、三川、栗山への陸路が出来る明治四十年までは山林から切り出した枕木、薪、木炭などが積み込まれ、逆に日用雑貨、食料品衣料、農道具などを売りに来る交易舟に利用された。マオイトーからイカベツ川・オサットーを経て川舟により江別・札幌に運ばれた。人力によるものも多かったが、帆舟やポンポン舟も使われていた。

ケヌフチの開墾　明治二十四年に北海道殖民地選定区画の実施で千歳郡「ケヌフチ」原野の測量が完了し、入植者が急増したが、いたるところに無名川があり、その水を利用して開田を目指した。第一段階はケヌフチ川、トビウシュナイ川を中心とする現在の神社周辺地域で、一部はポロナイ流域にも及んでいたようだ。第二段階はホロカ峠にいたる丘陵地帯で、明治四十年頃に長沼の創始者吉川（九又）一族が、吉川牧場を営み開墾している。

写真-6　吉川牧場

農業水利（用水）　明治二十四年に初めて米を収穫したとされる野元源蔵（『千歳市史』）、最初に入地した高橋久蔵も、畦つくりもままならないことから、造田の方法はヤチダモの木を伏せて土をかけた簡単な畦であったようだ。後の改修で根木がたくさん出ている。いずれもトビュシナイ川からの取水である。造田面積が増大するにつれ、大量の取水量を必要とすることから、ケヌフチ川からの取水に迫られていった。水門としては、三十六年、中の水門（神社下）、上の水門（笠原農場・森井平兵衛の管理）、下の水門（当初清水市郎・小栗喜四郎・坂田清兵衛等が幌内奥野沢の沢水を利用して耕作していたが、水量不足で、三十九年頃に松原横に樋門を作り取水）と三水門が出来たが、泥炭層の地盤に砂の堆積で漏水が激しく維持管理には、大変苦労したという（『郷土誌ケヌフチ物語』）。

風呂場文化　明治三〇年頃、松原清左ェ門は、水害常習地帯の長沼に見切りをつけケヌフチ断層付近から赤褐色の微温湧水がでている現在地を、モッコで崩し埋め立て温泉場を開いた。これが鶴の礦泉松原旅館である。また、同年代にわずか数百㍍しか離れていない現泉郷神社の麓に、硫黄の香りがする皮膚病の特効薬として地元の人々が、薪を持ち寄り愛用していた八幡温泉を、後に信田善吉が譲り受け信田温泉旅館とした（『郷土誌ケヌフチ物語』）。

昭和初期の開墾　昭和十年頃、農耕地拡大政策で、自作農創設資金の貸し付けがあり、民有未墾地、資産家保有の農耕適地山林・原野の開放が進められた。当時、由仁街道のオルイカよりに松原清之助が所有していた一〇万坪の土地が清水清太郎、岩本正生、登坂平三郎、登坂修司等に開放された。また、長沼郵便局長河合英治所有の二七万坪は宮崎保、中村稔等四人兄弟に開放された。当時、開墾作業はほとんど手起こしで、大人でも一反歩に三～四日はかかったと言うが、後に千歳に移る（株）伊藤木材もこの地で立木を買い焼き子を入れて炭を焼いていた。

炭　鉱　大正二年春、門間慶助と言う山師が、岡田沢、山岸沢、官林沢（『ケヌフチ物語』筆者による仮称）を丹念に歩いて、石炭の鉱脈を探していた。

　間もなく山岸沢で試掘を始め炭層を発見した。しかし当時出炭したものは、白亜炭でストーブの燃料としては不適正な低品質であった。坑内の湧水のため三年ほどで閉山している。昭和十二年日中戦争勃発と同時に山岸沢に今井炭鉱、村上・吉川沢に千歳炭鉱が再度採掘されたが、労働者不足と炭層の薄さで十六年に休止した。

南長沼用水路　前述（オルイカ・キウス地域開発）高木悌次郎発議の長沼村議会高木建議書により、千歳蘭越に頭首溝を設け三万三〇〇〇㍍もの用水路とケヌフチ地区のサイホン工事は、当時としては想像もつかない難工事であったろう。工事は大正一四年に着工し昭和二年に竣工を見た。この工事の土工夫の大半は他雇（たこ）と呼ばれる日雇い労務者であった。

　度重なる水害と破裂でケヌフチとしても受難の連続であったが、改良を重ね今日の用水路ができあがり、長沼地域の水田は揺るぎないものとなっていった。

酪農の始まり　ケヌフチへの乳牛の導入は大正の初めで、吉川浪治、吉川海助が始まりとされている。大正七年地区内に三〇頭近くの搾乳牛飼養があり雪印乳業の集乳所が出来た。当時の飼養農家は、前述の二名に加え小川勝次郎、岩本次郎左ェ門、信田乙作、小栗喜四郎、坂本石蔵等で、集乳所は昭和七年頃まで営業し、その後は千歳に運んだ。

森林防火組合　開拓初期は大木の林立していた山林をいち早く切り倒し開墾することが先決であった。しかし年間に消費する薪材も半端では

なく燃料の心配をしなければならなかった。大正の始めにケヌフチ沢官林の薪炭用材の払い下げにより当時由仁営林署より「山林所有者でないこと。官林の山火防止のために一ヵ月間の巡視をすること」を条件に薪の払い下げが行われた。これが家屋、納屋、畜舎の補修用材と薪材の払い下げ、更には火の見櫓、水門用材、公民館建築用材、学校用薪材にも及んで払い下げされた。また、開墾地の火入れの見張りも防火組合の仕事になっていった。

若衆組と獅子舞　明治二十九年まだ人員不足で神社は鶴が舞神社しか無くポロナイ、ハイタナイ、ケヌフチ、オルイカの青年達が集まって若衆組（若連中）を作っていた。中心的人物はポロナイに入植した新谷他人造（後にシーケヌフチに移住）や、ケヌフチの信田喜源治、乙作兄弟であった。

青年達は明治三十年代に祭りの行事に獅子舞を取り入れ、この伝統が今なお受け継がれており、「泉郷獅子舞」は千歳市の民俗無形文化財第一号（昭和五十四年指定）となった。この地域の大半が富山県を中心とする北陸出身者で未知の土地での不安、郷愁を抱き、娯楽のない時代の村祭りで、五穀豊穣、無病息災、家内安全を祈願し、毎年九月二十日に地域内全戸を練り歩き、大切に受け継がれている郷土の文化は、今もって地元の誇りとされている。

写真-7　今なお引き継がれている獅子舞
（『千歳市農業協同組合 30 年史』より）

ケヌフチ名物（柏餅）　夏至から一日目、太陽暦では七月一日頃のことを半夏生と言い、古くから田植えの終わったドロ落としで農家の休日とされている。ケヌフチではこの時期に必ず運動会を実施し、住民家族総出で楽しむ日であった。このときに家々の伝統である柏餅・笹餅が隣近所に振る舞われた。昭和初期までは砂糖で甘くしたアンコ入りの餅は、半夏生の柏餅以外には無く、こんな美味しいものを作った先人達の知恵に感服するものである（『郷土誌ケヌフチ物語』）。

参考文献

恵庭市『恵庭市史』一九七九年
玉蟲左太夫『入北記』一八五七年
千歳市農業協同組合『千歳市農業協同組合史・えぞ地いらいの農耕開拓とその時代背景』一九七七年
『千歳市農業協同組合史・創立三十周年記念』一九八四年
北海道ふ化放流事業百年史編さん委員会『北海道ふ化放流事業百年史』一九八八年
『記念誌　駒里』（駒里小学校開校七〇周年・駒里開基九〇周年記念）一九七六年
長沼町『長沼町九十年史』一九七七年
北岡善作『千歳・恵庭・廣島三村銘鑑録』一九三五年
清水修『郷土誌　ケヌフチ物語』一九九二年